

中はる歌

窪田 うつぼ 著



ま

ひ

る

野

明治三十八年九月十五日印刷
明治三十八年九月二十日發行

(定價三十錢)

著 作 者

窪 田 通 治

發 行 者

倉 田 清

東京青山千駄ヶ谷四百七十番地

印 刷 者

佐 久 間 衡 治

東京京橋區西紺屋町廿六七番地

發 行 所

鹿 鳴 社

東京青山千駄ヶ谷四百七十番地

複 製 を 許 さ ず

東京秀英舎印行

名著複刻全集 近代文学館 昭和43年9月

目次

緑	巡	板	殘	藤	あ	微	水	朝	椎
					こ			道	が
					が				も
蔭	禮	廂	紅	衣	れ	風	仙	遙	と

旅 板 枇 夏 懶 夢 眠 露 小 朝 小 波
の
の き ゆ と 夜 の
く
人 屋 杷 蝶 音 へ 露 貝 夕 風 香

う た が ひ
酔 枳 根 露 え 薫 覺 め の 貝 春 春 亡
殼 分 し 風 眠 殼 夜 日 母
き

い
け
に
へ
呼
び
な
む
母
宵
朝
な
ざ
早
春
お
も
か
げ
従
妹
よ

まひる野

窪田通治

椎がもと

われと見る皐月さつきすゞしき夜の風のわが面影を
吹きては消すと

照る月の影やくだけて袖にこぼれ拾ふに消え
て現うつなき夜よる

來ては倚る若葉の蔭や鳥啼きて鳥啼きやみて
靜寂にかへる

綠搖する風や洩り來る日の影や林は見する夢
遠き國

淺綠敷きては遠き草の中わがふる里の響きこ
ゆる

落葉衣わびて倚りける古き椽染むや若葉の香
のゆらめきて

朝靄や一本ひともと百合ゆりにまっはりて露と結ぶをあは
れと見るかな

人とわれ黙もくしても立つ磯の上波まろらかに走
りて還る

冴ゆる笛や聴きつゝ立てば青あお海うみの彼方あなの島に
君とあるごと

潮干潟波が残しゝ貝の殻のひとつを愛めでゝ袂
に秘めぬ

さゝ波や海の宮より現れてわれに乗れよとさ
ゝやぎ照れど

白珠の大き冠のくだけては落つると鳴りぬ遠
き雷いかづち

青嵐胸たゞよはす子雀の飛ばむともする翅つばさの
ふりや

かひなくも流せる涙かゝやきて今日けふよりこび
の眼に甦る

大^みき御息^いわがた^きめにしも洩^よらさすと遠^{とほ}くあほ
ぎぬそよ風^{かぜ}の夜^{よる}

わが胸^{むね}に觸^ふれつかくるゝものありて捉^{とら}へもか
ぬる青^{あお}葉^はもる月^{つき}

椽^{えん}に落^おつる棟^{あふち}のかげの小^こ揺^ゆぎを指^さもてとむる
山^{やま}の興^{きよう}かな

黄^た昏^{そがれ}の神^{かみ}やゐまさむ水^{みづ}につゞく棟^{あふち}の杜^つの枝^えひ
ろき蔭^{かげ}

思ふ人ありては添ひつ靜かなるかゝる景^{けし}色^きに
涙おとさば

野に遠き葦の小笛よこの宵を聴きて覺め來む
魂もあるべし

手を伸べていづれと摘むにたゆたひぬ笛にと
思ふ清き莖草

莖草よ中に葉守の神まさばわがこむる息待ち
てゐまさむ

露にぬれてゆらく朝野の細き草吹かば鳴るら
む莖にあるべし

試みに吹きぬる笛の音の冴えに心おごりの青^{あを}
葉^は窓^{まど}かな

そゞろにも逐はるゝごとき思ひして京に入り
けり青葉するころ

行き行きて若葉のかをりたゞならぬ神の忌桓
に迷ひ出でにけり

落ちよ瀧日のかげ白く照すらむ眞夏しばしの
ほどにあらずや

谷遠し青一色の麻のかぜ小木曾をとめの唄の
聲する

藤若葉ゑがきて影と戯れつ風來て搖るにおど
ろき別る

はかな心地涙とならむ黎明のかゝる静寂を鳥
來て啼かば

さまよひて黎明しのゝめ行けば木下闇なほわが路のあ
るにも似たる

覺めはてぬ夢や鳥の音くゞもりて朝靄まどふ
椎の下路

露のたま細葉に忍ぶひそめきもさやかに聽き
ぬ朝の野にして

江の水の覺めてゆらめく黎明しのゝめを別れもわぶる
夜の面影

さめやらぬ夢を若葉にこもらせて皐月さつきのころ
を里に住まばや

夏に見る大天地おほあめつちはあをき壺われはこぼれて閃
く雫

大海わたづみの波たはふれて足に寄ると立ちぬ青野の
薄月の中

夜よるは月の憩やすみひの御座おんざ晝はわが挿頭かざしの花を摘ま
む青野よ